

全身麻酔 A-1 が制御

徳大病院導入 現場の負担減

全身麻酔に使う薬剤の投与量を自動制御する「麻酔支援システム」を徳島大学病院が導入し、成果を上げている。2024年4月以降、200例以上の手術で使用され、麻酔科医の負担軽減や安全性向上につながっているという。

徳島大学病院によると、全身麻酔には、患者を眠らせる鎮静薬、痛みをとる鎮痛薬、手術中に動かないよう筋肉の動きを弱める筋弛緩薬の3種類を用いる。通常、麻酔科医が患者の状態を見ながら投薬量を調整している。

麻酔支援システムは、人

工知能（AI）が患者の脳波や筋弛緩薬の効き具合から必要な麻酔薬の種類、量を判断して自動で投与。麻酔科医は、麻酔薬の影響で変動する患者の血圧や呼吸などの状態管理に集中できるように、ヒューマンエラーの防止も期待できる。

福井大医学部などが18年



麻酔薬の種類、量を自動制御するシステムの端末（田中教授提供）

に開発し、同付属病院に次いで徳島大学病院が全国で2番目に導入した。医療技術の進歩で全身麻

酔をする手術は増えているものの、地方の急性期病院では麻酔科医らが不足している。徳島大学病院がシステムを導入して以降、他の病院でも医療現場の負担を軽減するために導入されているという。

徳島大学病院麻酔科の田中克哉教授は「システムは『全部お任せ』ではなく、車で言うと高速道路で

のオートクルーズに近いイメージ。運転は楽になるが、ハンドルを手放すわけにはいかない。今は麻酔科医の見守りが欠かせないが、今後さらに自動化が進むと期待している」と話している。

（山口和也）